

マナウス日本人学校の特色ある教育内容の実践

— 全日コースと文化コースとの共同生活を通して —

前マナウス日本人学校 教諭

静岡県富士市立富士南中学校 教諭 齊藤 秀典

キーワード：全日コース，文化コース，日本文化振興会

1. はじめに

かねてから希望していた在外教育施設で教鞭をとる機会を頂き、縁あってブラジルのマナウス日本人学校の小中一貫校で授業を行うという、本当に貴重な経験を得ることができた。マナウス日本人学校での3年間は私にとって特異な体験であり、多くのことを学ぶ機会となった。マナウス日本人学校は、不健康地（勤務環境が特に厳しい地域）と治安事情が著しく厳しい地域の両方に指定されている。

全ての日本人学校に共通して言えることだが、マナウス日本人学校は私立であり、経営は現地の企業や各種団体からの資金により運営されており、各家庭からも多額の月謝をいただき運営資金としている。ここで、マナウス日本人学校の特色と学校運営における私の経験をご紹介させていただく。

2. マナウスという町と地域

マナウスへは、日本（成田）から乗継時間を含めると約40時間を要する。マナウス市は、大西洋に注ぐアマゾン川の河口から約1600km内陸部、赤道から約300km南部に位置し、アマゾン川の本流ソリモエス川と支流のネグロ川の合流点に広がるアマズナス州の州都である。人口は180万人を超えるとも言われている。市内には人や車があふれ、非常に活気がある町であり、古くから港町として栄え、今でも常時2～3万トンクラスの船が出入りしている。マナウス市はブラジル北西部で最大の都市だが、周囲をジャングルに囲まれており、地理的にブラジル国内の主要都市へは空路あるいは水路以外に交通手段がなく、正に陸の孤島といえる場所である。

3. マナウス日本人学校について

(1) マナウス日本人学校の概要

マナウス日本人学校は昭和58年4月に文部省（現文部科学省）に認可され、今年で30年目を迎える。補習校時代から数えると32年目となり、平成24年4月1日現在、児童生徒数は30名である。小規模校の長所を生かし、現地の実態に応じた活動を取り入れながら充実した教育活動を展開している。平成24年度には、開校30周年の行事が開かれる。

学校所在地は、マナウス市郊外にある自然豊かな日系人移住地の中にあり、マナウス市の中心から車で20分くらいのところに位置し、周囲には日系の方々の農場があり、野菜や果物が栽培されている。近くには原生林が残っており、サルなどの小動物・昆虫や小鳥が多く、時折ナマケモノなども学校を訪れる。また、すぐ近くの川にはワニもすんでいる。



<全日コース(日本人児童生徒)>

(平成24年4月1日現在の人数)

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
男	0	0	1	2	1	0	0	0	2	6
女	3	0	2	1	0	2	0	1	1	10
学級	1		1		1		1		4	



<文化コース(ブラジル人児童生徒)>

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
男	0	1	1	0	1	1	1	2	0	7
女	0	0	0	1	2	1	1	1	0	6



(2) マナウス日本人学校の特徴

マナウス日本人学校の特徴として、まず小中一貫校であることがあげられる。小学部1年生から中学部3年生までの児童生徒が同じ空間の中で生活を共にしている。全ての学校行事について共に活動している。また、大きな特色として、現地ブラジル国籍の児童生徒が通学していることがあげられる。

文化コースの児童生徒は、体育、全校水泳、図工、音楽、書写の授業と全ての学校行事を全日コースの児童生徒と共に活動している。毎日3時間目まで日本人学校で学習し、午後に現地の学校に通学している。これは、ブラジルの学校が半日制であるため、このようなことが可能となっている。

学校の三大大行事として、運動会、アマゾン体験学習、学習発表会がある。他に毎月多くの行事があり、年間を通して児童生徒だけでなく保護者も参加して行われる行事が多くある。

教育課程は、小学校の教育課程と中学校の教育課程を組み合わせる年間教育課程を作っている。在外施設での教育内容は、基本的に日本の学習指導要領に従って行われ、児童生徒が日本に戻ってからも日本の教育に十分適用できるようにすることを目的としているが、日々の教育活動の中で日本の学校現場にはない特色ある教育が行われている。ここで、そのいくつかを紹介する。

<特色ある授業>

- ・ポルトガル語・・・現地採用教員(ブラジル人)によるポルトガル語の授業を週に1回、低学年(小1～小4)、高学年(小5～小6)、中学部ごとに行っている。
- ・現地理解教育・・・中学部の総合的な学習の時間に、インターネットを利用してマナウスについて各自が設定したテーマに沿って調べ学習を行っている。
- ・全校水泳・・・温暖な気候を利用して、年間を通して週に1回全校児童生徒合同により上級、中級、初級に分かれて水泳の授業を行っている。
- ・体育、音楽、美術、書写・・・文化コースの児童生徒も合同で低学年(小1～小4)、高学年(小5～中3)に別れ、各教科の授業を行っている。
- ・クラブ活動・・・全日コースと文化コースの小学部4・5・6年生を対象に年間5回実施している。内容は、主に学校に隣接するジャングルの中を散策する体験を行っている。
- ・フリー、アララ・・・治安が悪く子供達が普段外で自由に遊べないことから、火と木の7時間目の時間を使って全日コース児童生徒全員による遊びの時間としている。
- ・全校道徳・・・年に2回、外部講師を招いて1時間講演をしている。主に日系移民の方々に講師を依頼し、日本人移住について深く知る機会としている。

・合同学習・・・ブラジルの学校が長期休業中の2月に、文化コースの児童生徒が全日コースの授業に参加し、1時間目から7時間目まで全日コースの児童生徒と共に生活を行い、ブラジル人の児童生徒が日本の教育内容を学習する。

<主な学校行事>

大運動会・・・日本人学校と日系企業18社が合同で開催する運動会で、赤団、白団に分かれて競い合う。企画・運営は全て日本人学校職員が行っている。

アマゾン体験学習・・・船2隻を貸し切り、日系人が経営するアマゾン川岸にあるキャンプ場に行き、1泊2日の体験活動を行う。

学習発表会・・・高学年、低学年に分かれて発表会を行っている。高学年は、よさこいソーランと合奏合唱、低学年は、演劇と合奏合唱、その他に、全校合唱や他団体による演技（4団体）を日伯会館ホールで行っている。

修学旅行・・・旅行先はブラジルの首都ブラジリアで、3年に1回（2泊3日）行っている。

4. マナウス日本人学校文化コースの存在

平成5年度の開校10周年を契機に、地域貢献の一策として日本文化コースを開設し、現地ブラジル国籍の児童生徒を受け入れている。全日コース児童生徒との合同授業、諸活動を通して広く現地理解教育を行っている。これは、ブラジルの現地校が半日制であるため、このようなことが可能となっている。H22年度の文化コース選考を私が担当した。

(1) 募集人数と試験について

文化コースの教室には最大で16名の児童生徒が入ることができる。毎年、卒業等により空席が出た人数分の児童生徒の募集を行っている。受験資格は、入学時に小2（7歳）～中3（14歳）になるマナウス在住でブラジル国籍を持ち、現地校に通学している児童生徒である。ここ数年は日本人学校への入学希望者が多く、狭き門となりつつあり。受験者の中には、日系3世～4世の子供達の割合が多く占めているが、非日系のブラジル人の子供も受験に来ている。

(2) 選考試験の内容

- ①全校朝の会での自己紹介（日本語の表現）
- ②授業参加試験（日本語、図工、体育の授業に参加して関心・意欲・態度を見る。）
- ③筆記試験（日本語の基本的な読み方、書き方の試験）
- ④面接試験（校長と面接し、日本語の日常会話を聞き取れる能力があるかを見る。）
- ⑤書類審査による試験（現地校での成績を見る。）

(3) 合否の判定

全教員により判定会議を行い、授業での様子、筆記試験の結果、面接の感想、休み時間の様子、現地校の成績表などを総合的に考えて合否を判定する。



判定会議の結果を文化振興会理事会にかけ、承認を得られれば合格

5. マナウス日本文化振興会の存在

本校は当地進出の日本企業23社の代表がマナウス日本文化振興会を組織し、学校運営に当たっている。

この会には、在マナウス日本国総領事館の日本人学校担当警備官とマナウス日本人学校の校長が顧問として参画している。H23年度の日本文化振興会事務局を私が担当した。

(1) マナウス日本文化振興会の歴史

昭和55年 マナウス日本人学校子弟教育振興会を設立

(当時の進出企業 三洋, 松下, 東芝, ゼネラル, 本田)

昭和56年 「マナウス日本人学校子弟振興会」を「マナウス日本文化振興会」に改称

補習校としてマナウス日本人学校が正式認可

(2) 現在のマナウス日本文化振興会とその役割

現在、日本企業23社からそれぞれ毎月約5万円の企業負担金をいただき運営資金としている。また、保護者からも毎月約4万円(文化コースは約9千円)の月謝をいただいている。それらが全て各企業からの出資金として日本人学校運営資金となり、日本文化振興会がその予算管理を行っている。

実際に経理を任されているのは、日本人学校の事務職員と振興会担当教員と校長の3名であり、その3名の職員により毎月の収支決算を行っている。そして、毎月行われる理事会で、その月の収支決算報告と来月の予算報告と行事説明を行う。その理事会で承認されなければ1円の予算も使うことができない。理事会には、各企業の代表者が出席し、その理事会が日本人学校運営の全権を持っている。

H23年度に振興会事務局を担当した私の仕事は、毎月の予算管理と収支報告書の作成だった。この仕事は、私にとっては未経験の仕事の一つであり、1年間とても四苦八苦しながらの仕事であったが、経済的な面での学校運営を学ことができた貴重な体験であった。

7. おわりに

在外教育施設への派遣が決まり、夢と希望をもってマナウス日本人学校に赴任した。しかし、待ち受けていた現実とは全く違う世界だった。マナウスの町に降り立った時に見た風景に動揺を隠すことができなかった。「大変な所に来てしまった。」という思いが強く、しかもそこに家族を巻き込んでしまったことへの後悔の念を強く感じてしまった。マナウスへ来ることを決めたこの選択は、本当に正しかったのかと苦悩した。日本人学校に赴任した最初の1年間は苦労の連続で、日本の学校現場とは全く違う職場環境に四苦八苦し、溺れそうになりながらの1年間だった。しかし、日が経つに連れて環境に順応していく自分や家族の姿があり、3年後には心からマナウスを愛する気持ちを抱くまでに至った。そのような気持ちに至った背景には、私たち家族を心から受け入れてくれた日系人の方々の存在がある。

1928年に日本からの移民船が到着し、日本人による移住開拓の歴史が始まった。このアマゾンの厳しい自然環境の中で、先人達は幾多の困難を乗り越え、アマゾン地域に新たな農業を興してマナウスの地に大きく貢献してこられた。2008年には、アマゾン移住80周年を迎え、日系移民の功績を讃える様々なイベントが開催された。私たち日本人がマナウスの地でブラジル社会に受け入れられながら楽しく生活できたのも、日系移民の先人達による大きな遺産によるものだと実感することができ、先人達に敬意と感謝の念をもたずにはいられなかった。

また、赴任1年目は、派遣教員同士の人間関係に非常に苦しんだ。どんなに優秀な人材がそろっていてもチームワークがなければ良い学校は作れないことを確信した。2年目以降、新しく来た派遣教員に自分の思いを話すと私の意見に快く賛同してくれ、共に意見をぶつけ合いながらも良き人間関係を築きながら学校づくりに取り組むことができた。この素晴らしい仲間に出会えたことに心から感謝している。